

ハックルベリィ・フィン

—「その浪漫的な宿なし小僧」—

加藤 宗幸

Huckleberry Finn

—“The Romantic Outcast”—

Kato, Muneyuki

それぞれ「家庭での虐待と無情」(T13)⁽¹⁾から逃れたいと思っていたトム・ソーヤーとジョー・ハーバーは、ハックルベリィ・フィンと語らい三人で、セント・ピーターズバーグの村から三マイルほど、ミシシッピー川の下流にある無人島ジャクソン島へ渡った。真夜中すぎて島に着いた彼らは、焚火のそばで食事をしたが、「人里離れた無人島の原始林で、こんなふうに自由で野性的な饗宴を開くことは、この上もなく楽しいものに思われ、彼らは口をそろえて、もう二度と文明社会へは戻りたくないと言った。」(T13)夜が明けて目をさましたトムは、まだ眠っていた「仲間の海賊たち」(T14)のジョーとハックをやり起こした。

彼らは叫び声をあげて足音高く駆けだし、一、二分の後には、それぞれ裸になって、白い砂洲の澄んだ浅い水のなかで、追いかけてあつたり、ころげまわったりしていた。広い水面をへだてて、はるかかなたに眠っている小さな村に対しては何の愛着も感じなかった。いくらか増水したためか、それとも気まぐれな流れのいたずらか、筏が流されてしまったが、このことは彼らを満足させたにすぎなかった。筏が流れたことで、文明社会とのあいだの橋が焼きはらわれてしまったように感じられたからだ。(T14)

「自由で野性的な饗宴」を楽しみながら、「もう二度と文明社会へは戻りたくない」と言い、島と彼らの逃れてきた村とをつなぐ橋ともいうべき筏が流されてしまっても、彼らが忌み嫌う「文明社会とのあいだの橋が焼きはらわれてしまった」と感じて満足していたが、その日の午後もかなり進んだころの三人は、次のように描かれている。

森を支配する静けさときびしさときびしさとが、少年たちの心を圧迫しはじめた。彼らは、物思いに沈んだ。一種漠然としたあこがれの思いが心に忍び入った。この思いは、次第にはっきりした形をとってきた——それはホームシックの芽生えだった。「人殺し」のハックでさえ、なじみ深い玄関の階段と空樽のことを考えていた。しかし、三人とも自分の気弱さを恥じ、それを口に出すだけの勇気のあるものは一人もいなかった。(T14)

三人とも朝方の強気な気持はどこへやら、次第に彼らに迫ってくる文明社会への「ホームシック」を克服することはできなかった。彼らは結局のところ、文明社会を離れて生きてゆける者たちではなかった。なかでもトムは、物語の終りの方で洞窟からベッキー・サッチャーを助け出し、インジャン・ジョーの隠していた大金をも発見し、一躍英雄少年となり、その勇気と才知とのために、ベッキーの父親サッチャー判事から、将来文明社会における大の成功者になることが期待された。しかしながら、このようなトムとは異なっていて、文明社会内の周縁部においてその社会に寄生していた「村の浮浪児」(T6)ハックは、「大酒のみのせがれで村の母親たちから毛虫のように嫌われ恐れられていた。怠け者で乱暴者で、下品で、たちの悪い小僧であるばかりでなく、子供たちは彼を崇敬し、こっそり彼とつきあいたがり、思いきって彼のようになりたいとさえねがっていたからだ」(T6)とも、「自分の気持のままに行動した。天気がよければ、どこかの家の玄関の階段で眠り、雨が降れば、大きな空樽のなかで眠った。学校へも教会へも行く必要がなかったし、誰のいうこともきく必要はなかった。釣りでも泳ぎでも、好きなとき、好きなところへ行くことができ、好きなだけ、そこにいることができた。喧嘩をしてはいけないと叱るものもいなかったし、いくらでも夜ふかしができた。春になると、誰よりも先に既足になり、誰よりも遅くまで靴をはかなかった。顔を洗ったり、きれいな服を着なくてもよかったし、どんなひどい言葉だって言いたいほうだいだった。要するに、人生を価値あるものにするために役立つすべてのことができるのだ。自由を束縛されたセント・ピーター

ズバークジゅうの良家の少年たちは、みんなそう考えていた」(T6)とも描かれていて、彼はわれわれにとって、文明社会に馴染めない、文明社会に安住することができず、絶えずその社会の周縁部へ、あるいはその社会の外側へ向かおうとする衝動に駆り立てられる少年、原始的な自然人に先祖返りした少年ではないかとさえ感じられる。トウェインによって「その浪漫的な宿なし小僧」(T6)と称されているこのハックが、物語の終りでダグラス未亡人に養子にされたり、トムといっしょに発見した大金の所有主になったりして、文明社会の中心部に移り住むようになった。

ダグラス未亡人の養子となり、大金の所有主になったという事実によって、ハックは否応なく「交際社会」(T35)に引っぱりこまれ、それまでの何にも誰にも拘束干渉されない気ままな行動も、生き方も、話し方も、考え方もできなくなってしまった。「お上品な伝統」に従っての礼儀や作法や、習慣や言葉遣いの生活のために、彼は「どちらを向いても文明の手かせ足かせで身動きがとれず、手も足も出なかった。」(T35)「それでも三週間というもの、彼は、このみじめな生活を勇敢に耐え忍んだが、ある日突然姿をくらました」。(T35)そして、「人の行かない屠殺場の裏手の古い空樽」の一つを宿にして、「いまちょうど盗んできた食物の残りもので朝食をすませ、気持ちよく寝そべりながらタバコをふかしているところ」(T35)をトムに見つけられたが、その時のハックの「髪は乱れに乱れ、服は宿なしで幸福だったころの、あの見事なボロ服だった。」(T35)未亡人の家へ帰ることをすすめるトムに向かってハックが、未亡人のところでは「何から何まで、あんまり几帳面すぎて、おれは我慢できないんだ」(T35)と言うと、トムは、「だって、誰でもそうしているんだせ、ハック」(T35)と言う。そしてまた、「なあ、トム、金持になるってことは、はたで騒ぐほどいいもんじゃねえ。めんどろくさいことばかりで、汗のかきどおしだ。おれは、しょっちゅう、死んだほうがましだと思っていたよ。この服のほうが、おれにゃ似合うし、この樽のほうが気楽でいいんだ。おれはもうここから離れないつもりだ。トム、あの金さえなけりゃ、こんなめんどろくさいことに巻きこまれないですんだんだ」(T35)と訴えるハックに、トムは、「もうすこし我慢すればそのうちに、そういう暮しが好きになるよ」(T35)と言って彼をなだめる。そしてトムは、山賊の仲間に入れてやることを条件にハックに帰ってくることを承知させ、ハックに、「そいつはいいや。なあ、トム、海賊の千万倍もすばらしいぜ。おれは小母さんここにいるよ、トム。そして、もしおれが立派な山賊になって、世間の評判になったら、小母さんは、おれを引きとって世話したこ

とを、きっと誇りに思うだろう」(T35)と言わせるのである。

しかし、かつてトムとジョーとが山賊遊びをしたとき、「生涯合衆国の大統領となるよりも、一年間でもいいからシャーウッドの森で山賊になりたいものだ」(T8)と言っていた山賊遊びであったが、それはあくまでも真似ごとにはすぎないものであり、ハックがそれに幻滅を感じて飽きる日が遠からず訪れてくることは必定であった。われわれは、たとえハックが山賊の仲間に加わることの誘惑に負けて、未亡人の家に帰って落ち着くとしても、近い将来かならず家出をし、「文明の手かせ足かせ」(T35)から自由な世界へ逃れ出て行くにちがいないという予感を持たされる。果たせるかな、ハックを主人公とし語り手とする『ハックルベリィ・フィンの冒険』の第3章で、ハックが、「われわれはひと月ばかりときどき盗賊ごっこをしたが、そのあと僕はやめてしまった。ほかの者たちもみなやめた」(H3)⁽²⁾と語っているように、ハックは、ほかの者たちとともに、「われわれはだれからも物を奪いもしなければ、人を殺しもせず、ただ、その振りをするだけだった」(H2)山賊遊びをやめてしまった。しかしながら、家出をすることもなく、未亡人の家での暮らし方にも次第に慣れていった。ちょうどそのころ、ハックがトムに、「トム、あの金さえなげりゃ、こんなめんどろくさいことに巻きこまれないですんだんだ」(T35)と訴えた言葉のなかの「あの金」のために、大事件が、しかもハックの父親によって起こされ、遂にハックは、文明社会の外の世界へ拉致される、逃れ去る、あるいは文明社会と対決することを余儀なくされるのである。

トウエインはトムを主人公とする物語の後に、ハックを主人公とし語り手とする『ハックルベリィ・フィンの冒険』を書いた。『トム・ソーヤーの冒険』の最終章で、未亡人の養子になったのも束の間、耐えきれなくなって家を飛び出し、トムに発見されて連れ戻される前の自分のことについて、『ハックルベリィ・フィンの冒険』の中でハックは、「ダグラス未亡人は僕を養子にし、ちゃんとしつけをしてやると言った。だが、年がら年じゅう、この家の中で暮すのはやりきれなかった。万事に未亡人は几帳面でお上品で気が滅入っちゃうほどだ。それで、とうとう我慢しきれなくなって、僕は飛び出してしまった。もう一度ぼろを着こみ、砂糖の空樽を住家とし、のんびり、らくらくとした」(T35)と語っている。そして未亡人の家へ帰ってからの自分のことについては、「未亡人は僕にもう一度、あたらしい服を着せたので、僕は大汗をかき、窮屈でたまらなかった。そうして、またもや、元の通りのことが始まった。未亡人が夕食の鐘を鳴らすと、時間どおりに行かねば

ならず、食卓についてもすぐ食べてはいけない。未亡人が頭を垂れて食べもののかくどくど言うのを待たねばならないのだ。…夕食がすむと、未亡人は本を持ち出してきて、僕にモーゼと葦についておしえてくれるので、僕は一生けんめい、モーゼのことをすっかり知ろうとした。ところが、そのうちに、未亡人はモーゼがずっと昔に死んでしまったと口をすべらしたので、僕はモーゼなんかどうでもよくなった。死人なんぞに興味はないもの」(H 1)と語っている。トムを主人公とする物語の最終章と、ハックを主人公とする物語の第一章で語られている、「ハックが引きずりこまれた交際社会」(T 35)、「未亡人の几帳面さとお上品ぶり」(H 1)、「あたらしい服」(H 1)、「夕食時の守るべきしきたり」(H 1)などの、我慢の限界を超えるほどの耐えがたさや、「言葉が口のなかで生気のないもの」(T 35)になってしまう、「上品なきちんとした言葉づかい」(T 35)、かかわりなどないと思われる大昔に死んでしまっている人間モーゼについての勉強など、これらの文明世界のものは、ハックの「手かせ足かせ」となって彼の自由を奪ってしまうものであり、彼をして、「しょっちゅう死んだほうがまだ」(T 35)と思わせるものであり、トムに未亡人の家へ帰るように言われたときハックの顔から、「なごやかな満足の色」(T 35)を失わせ、そこに「暗い表情」(T 35)を浮かべさせたものであった。ハックの「手かせ足かせ」となって彼の自由を奪ってしまおうとするこれらのものに対するハックの反発は、「お上品な伝統」の中にいる多くの者たちからは、それが文明社会の中の逸脱者、浮浪者としてのハックの立場と、無教育によるハックの無知とのせいであるとして、笑い捨てられ無視されるように書かれてはいるが、それはまた多くの読者の、多くの世間の人間たちの、共鳴を呼ばずにはおかないものであった。そしてこのハックの反発に対する人びとの共鳴は、ハックの反発するものを含めたもろもろの「文明の手かせ足かせ」に対する反発の上へと広がってゆく。

それらのもろもろの「文明の手かせ足かせ」は、「人間が表面憎むようなふりをしている偏見は、人間の絶対的立法者である。まったくの慣習にすぎないものがいたるところで人間を自由に引きずり回している」⁽³⁾とか、「習慣はわれわれすべてを毫碌した人間にしてしまう。習慣は最初からわれわれに目隠しをしてきた。われわれはあらゆることを習慣に従って行なう。信仰でさえも習慣に従って行なう」⁽⁴⁾と、その『衣裳哲学』の主人公をして語らせているトーマス・カーライルや、「人間が登場するところ、必ず革命が起こります。古いものは奴隷のためにあるのです。…本当のキリスト教 — キリストがかつていただいていたような人間の限りなさに対する信仰 — は、いま

では失われています。人間の魂を信じる者は誰ひとりなく、すでに死んでしまったむかしの誰かを、ある特定の個人を信じているだけです。…何よりもまず、わたしがあなた方におすすめしたいのは、ひとり立ちすること、りっぱな模範を、たとい人びとの想像力のなかで神聖視されている模範であっても、断固として拒絶し、仲介者もなくヴェールもつけずに、敢然と神を愛してほしいということです。…何よりもまず、そしてひとえに心がけて頂きたいのは、流行、習慣、権威、快樂、金銭があなたにとって無価値なものであるように、— 測り知れぬ精神の特権をそなえて生きるといふことです⁽⁵⁾と、訴えかけるラルフ・ウォルドー・エマソンが考えていたように、人間を真の人間たらしめず、人間をそれらの奴隷にしておもうとするものであり、人間を目的として人間に奉仕するというそれらの本来の任務を捨ててしまった、「実質」⁽⁶⁾を失った「影」⁽⁷⁾のごとき存在となっている「形式」⁽⁸⁾なのであり、あくまでも人間の道具たるべきものであって、人間を盲目にさせることを許してはならないものであった。それらはまた、ヘンリー・デイヴィッド・ソーロウの、「眼をとじて眠りこけ、あまんじて見かけにだまされることによって、人びとは、純然たるまぼろしの基礎の上につねに打ち立てられている、自分たちの因習と習慣との日常生活をいたるところに確立し固定するのである」⁽⁹⁾という言葉からもうかがえるように、人びとが「眼をとじて眠りこけ、あまんじて見かけにだまされることによって」、「純然たるまぼろしの基礎の上につねに打ち立てられている」「日常生活」を成り立たせている彼らの「因習と習慣」なのであった。さらにまたそれらは、ナサニエル・ホーソンが、「わたしたちは、いっさいのわずらわしい形式だとか、堅苦しい習慣をかなぐりすてて、ある一日、輝く太陽が半周する間、インディアンとか、あるいは何かもっと因習にとられない種族のように生活するため、自由な大気に身をゆだねたのであった」⁽¹⁰⁾と語ったときの、「わずらわしい形式」、「堅苦しい習慣」、「因習」などであった。これらのものをすべて「形式」という言葉一語で総称するならば、これらの形式は、ハックをしてその中で暮していたとき、「しょっちゅう、死んだ方がましだ」(T35)と思わせ、また家出をして帰るようにとトムにすすめられて、ハックの顔から家出をしていた間の生活による、「なごやかな満足の色」(T35)を失わせ、そこに、「暗い表情」(T35)を生じさせたものであった。トウエインは、トムの物語を書き終えた後で出した、ウィリアム・ディーン・ハウエルズへの手紙の中で次のように語っている。

I have finished the story and didn't take the chap beyond boyhood.... If I went on, now, and took him into manhood, he would just lie like all the one-horse men in literature and the reader would conceive a hearty contempt for him.... By and by I shall take a boy of twelve and run him on through life (in the first person) but not Tom Sawyer — he would not be a good character for it.⁽¹¹⁾

このトウエインの手紙の中の言葉は、トウエインがトム物語の次の物語は、トム少年ではなくいまひとりの少年ハックを主人公として書こうと考えていることを示している。トウエインは、ハックが反発してやまない、人間の自由を拘束する「文明の手かせ足かせ」の中での日常生活を、ソーロウのいわゆる「純然たるまぼろしの基礎の上につねに打ち立てられている因習と習慣との日常生活」を信じて、それに盲目的に迎合しながら、その中での成功を誇らんとするトムの生き方に対して批判的になっていた。トム物語の中でのトウエインの、「この村にも、いろいろな無用なものといっしょに村長というものが存在するのだ」(T5)とか、「伝統的な習慣というものは、それを正当化する理由が薄弱であれば薄弱なほど、それだけ深く根をおろすものだ」(T5)という言葉からもうかがえるごとく、われわれはトウエインが、「因習や習慣」に対して、「形式」に対して、否定的なエマソンや、ソーロウや、ホーソンなどのアメリカ・ルネッサンスの、アメリカ浪漫主義の作家や思想家たちと、その思想の基盤を同じくしていることに気づかされるのである。

ハックは父によって、実際的な母ともいべき未亡人の家から拉致され、父とともに森の中の小屋に住むようになった。そして、母にも父にも、村の人びとにも自分が死んだと思わせる偽装をこらして姿をくらます。このようにしてハックは、母という名にからまる形式や、母が随順して彼の自由を拘束せんとする形式の世界から、また、父という名にからまる形式や、父がその中に住んでいて、ハックを辟易させるような形式の世界から逃れ出た。ハックはトムと二人で発見しその持主となることによって、「その不衛生な興奮の緊張で、村の多くの人びとの理性を狂わせてしまった」(T35)大金は、彼がその生存を疑わぬ父の出現を恐れてすでに処置してしまっていた。また、未亡人の家で着せられた服についてハックがトムに、「あんな服を着せられると、息がつまりそうなんだよ、トム。なんだか知らないが、呼吸が

できないような気がするんだ。それに、あんまり立派すぎるものだから、坐ることも、寝ることも、ころげまわることもできやしない」(T35)と語り、それを着ている姿を見られたハックは、父から、「固苦しいものを着こんでいるな—まったく。てめえ、自分をたいそうお偉いお方だと思ってやがるんだろう」(T5)と言われた。しかしこの良家の少年用の立派な服も、ハックが未亡人の家から連れ出され、父と暮すようになって二、三か月が過ぎて、父のもとからも離れ去るころには、「ボロボロになり汚れきってしまった。」

(H6) 文明社会にあつては、人間がその人格の如何にかかわらず、その持っている金の高によって評価され、その着ている衣服の質によって判断されるという傾向をますます強めている。「諸悪の根元」⁽¹²⁾と目されてきた金銭は、その誕生以来現代にかけて、ますます狂奔的な人間支配、人間物化、人間疎外の傾向を示してきていると言うことができよう。人間の着用する衣服もまた、金銭と同じような傾向を示してきた。ハックは、このような傾向をもって人間に迫る金銭や衣服から限りなく遠ざかり、父や母が迎合している日常生活の因習と習慣の世界からも離れ去ることによって、いよいよ新しい人生へ、冒険の旅へ、出発する用意をととのえたのだと言えよう。

トウェインは、しばしば窮屈で息のつまりそうな文明社会に対して、反抗を繰り返すトムを主人公とする物語の中で、トムたちをして、「無人島の原始林」(T13)の中での「自由で野性的な饗宴」(T13)の後で、「もう二度と文明社会へは戻りたくない」(T13)と言わせ、島と村とを結ぶ役割を果たす筏が流されたときは、彼らを大喜びさせて、「自分たちと文明社会とのあいだの橋が焼きはらわれてしまったように」(T13)感じさせている。最終章で、ダグラス未亡人の家に住むようになったハックの姿を、「どちらを向いても文明の手かせ足かせで身動きがとれず、手も足も出なかった」(T35)と描いている。続いて、ハックを主人公とする物語の第一章では、civilizeの代わりに sivilize を用いて“*The Widow Douglas she took me for her son, and allowed she would sivilize me.*” (H1) とハックに語らせ、さらに最後の章でも、同じように、“*But I reckon I got to light out for the territory ahead of the rest, because Aunt Sally she’s going to adopt me and sivilize me, and I can’t stand it. I been there before.*” とハックに語らせている。

トムの物語の中で、トムたちによって無邪気に反発され、ハックとその創造主であるトウェインによって、この物語の終りごろから次のハックの物語へと、嫌悪され呪詛されている文明や文明社会は、ハックがそれらから受け

る人間疎外の影響をこの上なく小さくした金銭や衣服、ハックの母ともいうべき地位につこうとしたダグラス未亡人や、ハックの「大酒のみ」(T6)の父親が盲目的に随順している金銭や衣服にかかわるものを含めた因習や習慣やそれらの世界、エマソン⁽¹³⁾やソーロウ⁽¹⁴⁾やホーソン⁽¹⁵⁾が言及している「形式」とその世界、ゲオルグ・ジンメルが、その性格について説明している「形式」とその世界、によって象徴されるものであった。

ジンメルによると、たいていの文明の発展において、生と形式との敵対的な関係から生ずる内的な衝突が見出される。ある文明のなかで行なわれる、生の創造的な運動は、法律、技術、芸術、学問、宗教のかたちでそれ自身を表現する傾向をもっている。こういう表現の目的は、それらを生み出したところの生を実現し、保護するが、そうした表現はその源である生のエネルギーから独立し、絶縁して、それら自身の方向とリズムとに従って進んでゆこうとする内在的な傾向を示すのである。それらのものは、出現した瞬間には、それらを創造した生に照応しているかもしれない。しかし、発展してゆくにつれて、それらは動きのとれぬ断絶に — 対立の状態にさえ — おちいってしまうように見える。それらは、必然的に、硬直したものになり、独立して、ある程度融通のきかない性質をおびてくる。こうして、それらは連続性もち、無時間的な性格をさえもつようになる。一言で言えば、それらは形式となるわけである。⁽¹⁶⁾

ソーロウは、「大部分の贅沢は、そして多くのいわゆる人生の慰安物は、人類の向上にとって不可欠でないばかりでなく、積極的な妨害物である。贅沢と慰安に関しては、最も賢い人びとはつねに貧乏人よりもっと簡素で乏しい生き方をしてきた。中国人、インド人、ペルシャ人、ギリシア人などの古代の哲人たちは、外的の富においては、これより貧しい者はなく、内的のそれにおいてはこれより富んだ者はいない階級であった。…われわれが自発的貧乏とよぶべきである有利な地点からして以外には、何びとも人間の生活の公平もしくは賢明な観察者であることはできない⁽¹⁷⁾と語り、不必要な「贅沢」や「慰安物」を追求するという「賤しい労働からの休暇」⁽¹⁸⁾をもつことになった、「自発的貧乏」な地位に立った人間の為すべきことは、「今や人生に対して冒険することである」⁽¹⁹⁾と語っている。ソーロウのこのような主張に照らすならば、ハックは、金銭や衣服や、父や母の従事している日常生活の因習や習慣の形式の世界から可能なかぎり離脱することになった、つまり、

「中国人、インド人、ペルシャ人、ギリシア人などの古代の哲人たち」のような、「外的の富においては、これより貧しい者はなく、内的のそれにおいてはこれより富んだ者はいない階級」の一人になったのである。さらに彼は、「何よりもまず、そして心がけて頂きたいのは、流行、習慣、権威、快楽、金銭があなたにとって無価値なものであるように、— あなたの目をおおい、あなたには見えない包帯になることのないように、— 測り知れぬ精神の特権をそなえて生きるようにということです」⁽²⁰⁾と語っているエマソンの言葉に従えば、彼の「目をおおい」、彼には「見えない包帯」となって、彼の「観察者」としての仕事を、「人生に対する冒険」を、妨害するものである「流行、習慣、権威、快楽、金銭」を、ジンメルいわゆる「生と対立の状態」になった、「生の創造的な運動」の自己表現である「法律、技術、芸術、学問、宗教」などの形式をも含んだ因習や習慣の形式を、「無価値」なものとしてかなぐり捨て、ソーロウのいわゆる「自発的貧乏とよぶべきである有利な地点」に立って、「人間の生活の公平もしくは賢明な観察者」となること、このような意味において、「人生に対して冒険すること」への冒険の旅に出かける準備をととのえたのである。彼の創造主であるその「詩的真實」の中にいるトウエインとともに。

ソーロウは「散歩」の中で、「もしも諸君が、父母、兄弟姉妹、妻子友人を残して、しかも二度と顔を見ない覚悟ができれば— もしも諸君が、負債を払い、遺言をしたため、自分の問題をすっかり解決して、自由な人間となるなら、諸君はもう、散歩の用意がととのったのである」⁽²¹⁾と語っている。またエマソンやソーロウが大きな影響を受けた彼らの先達の師ともいべきルソーは、『告白』(*Les Confessions*, 1781-1788)の中で、「わたしがひとり徒歩で旅したときほど、わたしがゆたかに考え、ゆたかに存在し、ゆたかに生き、あえていうならば、ゆたかにわたし自身であったことはない。歩くことはわたしの思想を活気づけ、生き生きさせる何ものかをもっている。じっとひとところに止まっていると、ほとんどものが考えられない。…わたしの隷属を思い起こさせる一切のもの、わたしの境遇を思い出させる一切のものから遠ざかることが、わたしの魂を解放し、思想にいっそうの大胆さを与え、いわば万有の広大無辺の中にわたしを投げこんで、何の気がねも、何の恐れもなく、存在するものを結合させ、選択させ、思いのままに自分にしたがわせるのである。わたしは全自然を自由に処理する」⁽²²⁾と語っている。ソーロウのいわゆる「自発的貧乏とよぶべきである地点」とは、「外的の富においては」最大に貧しく、「内的のそれ」においては最大に富んでいる状態

あり、「自分の問題をすっきり解決して、自由な人間となる」ことであり、また、ルソーのいわゆる「わたしの隷属を思い起こさせる一切のもの、わたしの境遇を思い出させる一切のもの」から遠ざかって、「わたしの魂を解放する」ことであった。その地点は、ルソーによれば、「わたしがゆたかに考え、ゆたかに存在し、ゆたかに生き」、「ゆたかにわたし自身である」ことのできる境遇であった。ハックの冒険の旅は、ソーロウの「散歩」や、ルソーのひとりでの「徒歩」の旅に、なぞらえることのできそうな性格のものであった。

ハックやトウエインをして、またエマソンやソーロウやホーソンをして、「形式」の世界に反逆させ、その世界から遠ざからせたもの、そして彼らを、「人間の生活の公平もしくは賢明な観察者」、「人生への冒険者」たらしめたものともいべきエネルギーは、一体何に由来するものであったろうか。

こうした形式がなければ、創造的な生がその姿を現わすことはできなかったろう。生はたえず形式をつくり出してゆく。しかし、生は絶え間のない流れのように流れつづけ、たえず新しい形式を生み出してゆくとともに、またすぐさまそうした形式の堅固さや永続性と対立するようになる。こうして、生のエネルギーは、文化的構成体が出現するたびごとに、急速にまたは徐々に、それをかじりとってゆく。一つの構成体が発展してくると、その後継者が地下で発展してゆき、短期間または長期間の闘争ののちに、ついにそれにとって代ることになる。

現代においては、生と形式との間のこうした対立が非常に激烈なものになっている。（その理由を分析してはいないが、ジンメルはそう信じている。）彼の考えによると、生はもはやあれこれの特殊な形式、自己に押しつけられた、よそよそしいものと感じられる形式に反抗するのではなく、形式そのもの、形式の原理に反抗しているのである。したがって、スタイルや形式を尊重していた古い時代を賛美するモラリストたちが、現代において支配的になっている「形式の欠除」ないし無形式性について苦情を述べているのは、あながち間違いではない、と彼は感じている。しかし、モラリストたちは、現在起こりつつあることが、たんに伝統的な形式の死滅というような消極的なものだけではないことを見落しているのである。そうした形式を拒否するエネルギーは完全に積極的な、生への衝動なのである。⁽²³⁾

フリッツ・パッペンハイムは、ジンメルは、「現代においては、生と形式との間のこうした対立が非常に激烈なものになっている」、そして人間の「そうした形式を拒否するエネルギーは完全に積極的な、生への衝動なのである」と考えていると語っている。不変と常套の静的な世界を志向する古典主義の時代から、変化と創造の動的な世界を志向する浪漫主義の時代へと急激に移行していった19世紀浪漫主義の時代は、まさに現代に優るとも劣らないほどに、生と形式との対立の激烈な時代ではなかったろうか。19世紀アメリカの浪漫主義時代の人びとの、生と形式の対立の激烈さを助長した主な要因の第一は、形式化した文明社会の因習や習慣などの形式が、人びとに拘束を強いる傾向が生じたとき、人びとには、辺境開拓地の自由な生活へ逃げ出すことのできる辺境の門があったことと、過去からの因習や習慣などの形式は、辺境開拓地先端の原始性との不断の接触によって、不適応なものとして消えてゆく運命にあったということ⁽²⁴⁾であった。第二は、政治的独立を遂げた新生国家の、経済的文化的な自主独立をも達成させようという意気に燃えるアメリカの「未来を信じる者たちは、過去の力が続いていることを示す多くのしるしが、アメリカの社会に点在しているのに気づかざるを得なかった。つまり、制度、社会風習、文学形式、宗教教義など、前時代からもち越されたもの、遠くヨーロッパからもち込んだものが、手をつけたばかりの新しい創造的な仕事にとっては障害であると思われた」⁽²⁵⁾ことであつた。そして第三は、商業の発達によって時代はすでに、神中心の時代から人間中心の時代へと移行していたが、その後の目ざましい科学の進歩と産業の発達によって、科学や産業に携わる、すなわち一種の創造行為に携わる中心的な人間たちが、かつての創造主としての神の地位を奪ってしまったことであつた。これらの要因を背景として、形式との対立において優位に立ち、形式を支配せずにはおかぬ勢いを得たアメリカ人たちは、絶大なる自己信頼の念、自恃心を抱くことになった。そのアメリカ人たちの代弁者ともいふべきエマソンは、その自恃心の高揚のあまり、「世界は無であり、人間こそすべてだ。あなた自身の内部には自然全体を支配する法則がある」⁽²⁶⁾とか、「人間こそ世界の主人だ」⁽²⁷⁾とか、「だから君自身の世界を築きたまえ」⁽²⁸⁾とか、「人間でありたい者は、誰であれ、順応とは縁を切らねばならぬ」⁽²⁹⁾とか、また、「本当の人間はすべての環境を無意味なものにしてしまわずにはいないほどの存在にちがいない」⁽³⁰⁾と揚言しているのである。

アメリカ・ルネッサンスの、アメリカ浪漫主義の時代の作家や思想家たちが発見した自我の、その自由な実現をはかる自己信頼の念、自恃心に基づく

生存と対立し、それを妨害せんとする硬直化した頑固な因習や習慣や形式を、過去という語で総称して、ホーソンの『七破風の家』(*The House of Seven Gables*, 1851)の主人公である、「現在が至上最高であるという観念を人生の思いつく限りのあらゆる面に応用しようとした若い改革者」⁽³¹⁾ ホールグレイブは、次のように語っている。

ぼくたちはこの過去から決して逃げることはできないのでしょうか。過去はまるで巨人の死体のように現在の上ののっかっています。実際、言ってみれば、若い巨人が、ずっと昔に死んでいて、立派に埋葬さえしてやればいいお祖父さんの死体、老巨人の死体を運び回って、自分の力をすっかり消耗しなければならぬようなものですよ。まあちょっと考えてご覧なさい、そうすれば、ぼくたちがすぎ去った過去の — はっきり言ってしまえば死の — 奴隷だということがわかって、びっくりしますよ。…ぼくたちは死人の儀式と信条に従って、生きた神を礼拝しています。ぼくたちが、自由な意向から何をしようとも、死人の氷のような手が邪魔をします。⁽³²⁾

アメリカ・ルネッサンスの、アメリカ浪漫主義の、作家や思想家たちは、過去の人間や過去のものを偶像化し、現在に生きている人間の価値を軽視するという不自然な偏見から自由となり、いかに人びとによって神聖視されているものであろうとも、それを拒絶して、仲介者もヴェールもつけずに、敢然とひたすら真理を愛することが、本当の人間の使命であると考えた。エマソンやソーロウや、ホーソンやメルヴィルやホイットマンなどの、次のような言葉からも、過去というものの性格と、過去を拒否するアメリカ・ルネッサンスの、アメリカ浪漫主義の時代の作家や思想家たちの、過去に対する態度は明らかである。

古いものは奴隷のためにあるのだ。⁽³³⁾

過去の世紀は、ことごとく魂の健やかさと権威を阻もうとする共謀者だ。⁽³⁴⁾

魂が蘇れば、過去の価値は永遠に下落し、いっさいの富が貧困に、いっさいの名声が恥辱にかわり、聖者と悪漢を同一視し、イエスとユダをひとしなみに押しつけてしまうからだ。⁽³⁵⁾

一つの世代は他の世代を坐礁した船のように見棄てるものだ。⁽³⁶⁾

ぼくたちは、何よりもまず、現在以外に生きる余裕がない。過去を思い出すことなどに過ぎ行く人生の一瞬たりとも浪費しない人は、他のあらゆる人間にもまして恵まれている。⁽³⁷⁾

過去は振り返らないことにしましょう。過去は過ぎ去りました。どうして今こんなものの上にためらう必要がありましょう、ごらんなさい。この印と一緒に、私が過去をもとにかえし、なかったのと同じにしてしまいます。⁽³⁸⁾

過去は死んだのだ。過去の復活はない。⁽³⁹⁾

過去は多くの事につけ、人類の敵だ。

過去は暴君らの教科書だ。…過去によってのみ支配されている者は、ロトの妻のように、後ろを見た姿のまま結晶化し、永遠に前を見ることができないのだ。…さまざまの点で、われわれアメリカ人は過去の金言の拒否に専念している。⁽⁴⁰⁾

過去はすべて背後に残し、もっと新しく大きな世界、多様な世界に進み出て行く。⁽⁴¹⁾

雄々しい精神の持主なら、たとえ慣習や先例や権威であっても、もし自分の心にそぐわないときには、ゆったりそこを通りぬけて新しい世界に踏み出すものだ。⁽⁴²⁾

トウエインは、すでに、トムのお話の中で、「この村にも、いろいろな無用のものといっしょに村長というものが存在するのだ」(T5)という言葉や、「伝統的な習慣というものは、それを正当化する理由が薄弱であれば薄弱なほど、それだけ深く根をおろすものだ」(T5)という言葉を通じて、伝統的な習慣というものの形式性、過去の形式性を洞察している。そしてハックのお話の第一章においては、ダグラス未亡人から「モーゼと葦」について学んでいたハックが、モーゼは遠い昔に死んでしまった人間だということを知ったとき、「僕はモーゼなんかどうでもよくなった。死人なんぞに興味はないもの」(H1)と語らせている。このハックの言葉は、作者トウエイン自身の言葉でもある。そしてハックの過去に対する、伝統的な習慣に対する、形式に対する態度は、トウエイン自身のものであると言っても過言ではない。トウエインは、『赤毛布外遊記』のはしがきや、その第1部第26章で

次のように語っている。

これは遊山の覚書ほどのものにすぎないのであって、その目的とするところは、もし人がヨーロッパと東洋とを、自分よりも前に旅行した人たちの眼を借りず、自分自身の眼で見物して歩くとしたならば、その人はどんな風に見るのであるかということ、読者にそれとなく知らせるためにある。…旅行記の普通の書き方から、いくらかそれることがあって、大方の非難を受けるかもしれぬが、私は、それに対して、格別弁護はするまい。— なぜならば、私は、自分は公平な眼で見てきたと思っているから。そして、如才なく書いたかどうかはともかくとして、たしかに私は、少なくとも、正直に書いたと信じているからだ。⁽⁴³⁾

最も高貴な歓喜を、人に与えるものは何か。他のどのような経験にもまさって、人の胸を誇らかに高ぶらせるものは何か。発見である。他人が誰もかつて歩いたことのない場所を、自分が歩いていると気づくことだ。いかなる人間の眼も、今までに見たことのないものを、自分が見ているのだと知ることだ。他人の呼吸に触れたことのない大気を、吸っているのだと自覚することだ。ある考案を生み出すこと — 大思想を発見すること — すなわち、従来、精神的に何回も耕された田野の埃土の真下から、知的な金銀の鉱塊を発見することだ。新しい蝶番を発明すること、電光に通信を運ばせる方法を案出することだ。つまり、先頭を切るということ — それが、眼の着けどころだ。他の誰よりも先に、何かを為し、何かを言い、何かを見ることだ — ほかの楽しみは面白味がなく平凡で、ほかの恍惚境は安っぽくつまらないが、それらに比べて、これらこそ、真の歓喜を与えるところのものである。⁽⁴⁴⁾

上に述べてきたトウエインの言葉やハックの言葉と、これらの『赤毛布外遊記』からの二つの引用文とを合わせて考えるとき、トウエインも、「何よりもまず、そしてひとえに心がけて頂きたいのは、流行、習慣、権威、快楽、金銭があなたにとって無価値なものであるように、— あなたの目をおおい、あなたに見えない包帯になることのないように、— 測り知れぬ精神の特権をそなえて生きるようにということです」⁽⁴⁵⁾と、訴えたエマソンと同じ思想的基盤の上に立って活動した、ソーロウやメルヴィルやホーソンやホイットマンたちと同じように、アメリカ・ルネッサンスの、アメリカ浪漫主義の思

潮の中の作家であったと考えられる。シェリングは、「古典的気質は過去に学び、浪漫的気質はそれを無視する」⁽⁴⁶⁾と述べているが、「過去」を尊重する「古典的気質」を排除し、「過去」を拒絶する「浪漫的気質」に衝き動かされたトウェインも、アメリカ・ルネッサンスの、アメリカ浪漫主義作家の一人であったのである。

グリアーソンは、古典的と浪漫的という二つの言葉を定義して、次のように語っている。

古典的と浪漫的 — この二つは歴史上における人類の心臓の収縮と拡張なのである。それらは、一（古典的）は秩序と、総合と、包括的ではあるが限定的な、それゆえ包含的であると同時に排除的な思想、感情、行動の秩序化とに対するわれわれの要求を表わし、他（浪漫的）は、すべての人間的総合の避けることのできない限定性、カーライルの比喻で言えば、われわれの衣服がもはやわれわれに適合しないという、古典的なものが因習的なものになってしまったという、そしてわれわれの精神的憧憬が餓死せしめられつつあるという、われわれの現世的衝動が押しこめられ、閉じこめられ、幽閉されているという避くべからざる発見を表わす。かくて心情と想像とはその屍衣を破って伸びあがる。⁽⁴⁷⁾

「生の創造的運動」によって生み出されたものの「表現」は、生み主の生に仕え、生を目的として生を実現するための手段となるべきものであるが、やがて硬直化して融通がきかなくなり、生と対立する形式となる。ハックは、「カーライルの比喻で言えば、われわれの衣服がもはやわれわれに適合しないという、古典的なものが因習的なものになってしまったという、そしてわれわれの精神的憧憬が餓死せしめられつつあるという、われわれの現世的衝動が押しこめられ、閉じこめられ、幽閉されているという」状況の中にあった。彼のたびたびの死への願望は、強いられた因習の中の、過去の中の、形式の中の、死の中の、生を送らざるを得なかった彼の、不安と憂愁と苦悩を原因とするものであった。そして彼のこれらの不安と憂愁と苦悩は、浪漫主義文学作品の作家たちや、その創造になる主人公たちのものであり、浪漫主義作家トウェインのものでもあったと考えられる。

不可抗的にダグラス未亡人のもとで、続いて父親のもとで、死中の生を送っていたハックが、ついに二人のもとから逃れ去るときが訪れたが、そのときは、彼がそれまでの死中の生の中で身につけていた「屍衣を破って伸びあ

がる」ときでもあった。ハックはその「完全に、積極的な生の衝動」⁽⁴⁸⁾によって絶えず駆り立てられ、因習や生命をなくした習慣に対する、形式に対する、過去に対する、人間の絶対的優位性を確信し、それを主張して、それらのものである人間の隷従を敢然と拒否する人間として再生した、浪漫主義作家トウェインによって創造された浪漫的主人公なのであった。因みにハックは、トムの物語の始めの方で、すでに、作者トウェインによっていみじくも「浪漫的」という語を冠せられて、「その浪漫的な宿なし小僧」“the romantic outcast” (T 6) と呼ばれているのである。

注

- (1) ()内のT 13は *The Adventures of Tom Sawyer* (New York, Gabriel Wells, MCMXXII) の第13章を示す。
- (2) ()内のH 3は *The Adventures of Huckleberry Finn* (New York, Gabriel Wells, MCMXXIII) の第3章を示す。
- (3) Carlyle, Thomas, *Sartor Resartus* (Cassel and Co. Ltd.), p. 49.
- (4) *Ibid.*, pp. 190-191.
- (5) Emerson, Ralph Waldo, “An Address,” *The complete Works of Ralph Waldo Emerson Volume II* (Houghton, Mifflin and Company, 1903), pp. 144-146.
- (6) Emerson, Ralph Waldo, “*The Lords Supper*,” *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson Volume XI* (Houghton, Mifflin and Company, 1904), p. 22.
- (7) *Ibid.*
- (8) *Ibid.*
- (9) Thoreau, Henry David, “Where I Lived and What I Lived For,” *Walden* (Houghton Mifflin Company, 1906), p. 106.
- (10) Hawthorne, Nathaniel, “The Old Manse,” *Mosses from an Old Manse* (Ohio State University Press, 1974), p. 21.
- (11) *Mark Twain’s Letters I* (Gabriel Wells), pp. 258-259.
- (12) 「テモテへの第一の手紙 6.7-10」『新訳聖書』(日本聖書協会, 1973), p. 331.
- (13) “The Lord’s Supper,” p. 22.
- (14) H. D. Thoreau は、“Plea for Captain John Brown,” *The Writing of Henry David Thoreau IV* (Houghton Mifflin Company, 1906) の440頁の “when at least the present form of slavery shall be no more here” で、「形式」“form” を使っている。
- (15) Nathaniel Hawthorne は、“The Old Manse,” *Mosses from an Old Manse* の21頁の “when we cast aside all irksome forms and straightlaced habitudes” の中で、「形式」“forms” を使っている。
- (16) Pappenheim, Frits, *The Alienation of Modern Man* (Monthly Review Press,

- 1968), p. 20.
- (17) Thoreau, Henry David, "Economy" *Walden*, pp. 15-16.
- (18) *Ibid.*, p. 17
- (19) *Ibid.*
- (20) Emerson, Ralph Waldo, "An Address," p. 146.
- (21) Thoreau, Henry David, "Walking," *The Writings of Henry David Thoreau V* (Houghton Mifflin Company, 1906), p. 206.
- (22) 桑原武夫訳、『ルソー』(筑摩書房, 1966), p. 101.
- (23) *The Alienation of Modern Man*, pp. 20-21.
- (24) Turner, Frederick Jackson の *The Frontier in American History* (Robert Krieger Publishing Company, Inc., 1985) の第一章 "The significance of the Frontier in American History" を参考した。
- (25) Lewis, R. W. B., *The American Adam* (The University of Chicago Press, 1955), p. 13.
- (26) Emerson, Ralph Waldo, "American Scholar," *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson Volume II* (Houghton, Mifflin and Company, 1903), p. 114.
- (27) Emerson, Ralph Waldo, "Nature," *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson Volume II.*, p. 68.
- (28) Emerson, Ralph Waldo, "Nature," p. 76.
- (29) Emerson, Ralph Waldo, "Self-Reliance," *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson Volume I* (Houghton, Mifflin and Company, 1903), p. 50.
- (30) *Ibid.*, p. 61.
- (31) *The American Adam*, p. 18.
- (32) Hawthorne, Nathaniel, *The House of Seven Gables* (Ohio State University Press, 1971), pp. 182-183.
- (33) Emerson, Ralph Waldo, "An Address," p. 144.
- (34) Emerson, Ralph Waldo, "Self-Reliance," p. 66.
- (35) *Ibid.*, p. 69.
- (36) Thoreau, Henry David, "Economy," *Walden*, p. 12.
- (37) Thoreau, Henry David, "Walking," pp. 245-246.
- (38) Hawthorne, Nathaniel, *The Scarlet Letter* (Ohio State University Press, 1983), p. 202.
- (39) Melville, Herman, *White Jacket* (Meicho Fukyu Kai Publishing Company Ltd., 1983), p. 188.
- (40) *Ibid.*, pp. 188-189.
- (41) Whitman, Walt, "Pioneers! O Pioneers!" *Leaves of Grass* (Penguin Education, 1975), p. 258.
- (42) Cowley, Malcolm, ed., "Whitman's Introduction," *Walt Whitman's LEAVES*

- OF GRASS* — *The First* (1855) *Edition* (Penguin Books, 1977), p. 13.
- (43) Mark Twain, “Preface,” *The Innocents Abroad Vol. I* (Gabriel Wells).
- (44) Mark Twain, *The Innocents Abroad Vol. I* (Gabriel Wells), p. 274.
- (45) Emerson, Ralph Waldo, “An Address.”
- (46) Furst, R. Lilian, *Romanticism* (Methuen & Co. Ltd., 1976), p. 3.
- (47) Grierson, Herbert, *The Background of English Literature* (Chatto and Windus, 1950), pp. 287-288.
- (48) *The Alienation of Modern Man*, p. 21.